

医師3人が病院創設

AMDA活動報告

救える命があれば

どうくでも

□18□

菅波 茂



インドネシアのジャワ島中部で五月二十七日午前五時五十七分、約五千七百人の死者と三万八千八百人の負傷をだした地震が発生した。その際、AMDA多国籍医師団編成時に迷ったことがある。

バン格拉デシユ支部に支援を要請するか否かであったが、結論としては要請しなかった。

二〇〇四年十二月二十六日に発生したスマトラ島沖大地震・津波被災者

私と妻はことし五月四

「ダッカの奇跡」

日、バン格拉デシユの首都ダッカの中心地に設立された「日本・バン格拉デシユ友好病院」の開院式に参加した。六階建てで、二十三人の医師と病床。開院式には外務大臣や日本大使も出席した。主役はAMDAバングラデシユ支部を創設した三人の医師たちである。

全員が日本で医学博士を修得。サード・アブダン・ナイム医師は東京大学医学部、ジュナイド・シャフィック医師は九州大学医学部、ファイサル・モアザム医師は琉球大学医学部を卒業した。新しい病院の準備と選抜肢はなかつた。返済を期待せず、二千五百万円を貸した。ただし、三

の派遣要請はできなかつた。さかのほること二十二年。大学院卒業の一年前、彼ら三人が家族を連れて総勢十二人で岡山のわが家に来た。「母国に帰るべきか、欧米に渡るか。決めてほしい」。三人は悩んでいた。当時、バングラデシユの医学界は欧米の修士号修得医師が主力だった。日本の博士号ではボジションがなかつた。そのため、欧米でも一度修士号を取るか、開業するかであった。三人の選択は開業だった。私と妻には残された。返済を期待せず、二千五百万円を貸した。ただし、三

民家借り30床でスタート



ミャンマー難民緊急医療援助プロジェクト1992-1993年、バングラデシユ(AMDA提供)

れない思い出がある。一九九二年、内政上の問題でミャンマーからバングラデシユに逃げたロヒンギャ難民の救援プロジェクトである。

多数の欧米のNGOが国境付近の救援活動に駆けつけていた。AMDAにとつて初めての海外での人道支援プロジェクトだった。

右も左も分からなかつた。とりあえず、ナイム医師を団長とした医療資金で出発。バングラデシユに本格的総合病院の出現である。将来が楽しみである。

AMDAバン格拉デシユ支部長であるナイムアはAMDAのことを書き立てた。バングラデシ

ユ政府からは信じられないような破格の待遇を受けた。なぜか。理由は一つ、AMDA医療チームの団長がバングラデシユ人だったからである。

「援助を受ける側にもプライドがある」ことを学んだ。さらに、スマトラ島沖大地震・津波被災者救援活動で学んだのは「ローカルイニシアチブ」だった。それは「現地の問題を一番よく知っている人が一番答えを持っている」である。

これに「相互扶助」を加える。この三つの視点はAMDA多国籍医師団の「救える命があればどこへでも」を支えている哲学である。

AMDA(特定非営利活動法人アムダ)理事長

この連載は毎月第四日曜日に掲載します。